



# イギリスの大学教育

やました  
山下  
じゅんこ  
順子

●英国ブリストル大学 社会学・政治学・国際学学科 講師

イギリスの大学で教え初めて5年になる。まだまだ不慣れなことも多いが、イギリスの大学教育は何を目的とし、学生は何を学んで卒業していくのか、いくつか見えてきたこともある。私の専門は比較社会政策とジェンダーで、教育学は専門外だが、今回はイギリスの大学教育についてこれまでの経験から少し考えてみたい。

現在私が勤めている英国ブリストル大学は、英国の研究重点型有力大学24校で構成されるラッセルグループの一員で、総学生数は21,000人、医学、薬・歯学、理学、工学、人文科学、社会科学の6つのスクールからなる大規模な大学である。私が所属するのは、社会学・政治学・国際学学科で、学科内には学部生が約600人、修士の学生が約200人、博士学生が約60人在籍している。

ブリストル大学での学部教育の中心は、講義、セミナー、パーソナルチュートリアルからなり、教育の中心は10数名で行われる小規模セミナーである。学生は12週からなる1学期間で3つの授業、通年で6つの授業を受講する（学部生の授業は6月初めまでの2学期間のみ）。1週間に授業は3つのみであるが、学生向けのハンドブックには、それぞれの授業に対し週10時間前後の学習が期待されていると書かれてある。すなわち、授業外で

週30時間前後の学習が必要ということになる。私が担当する学部3年生向けの「東アジア社会論」の授業は、毎週講義1時間とセミナー2時間で構成され、学生は学期終了後に3,000語の課題論文を提出し、単位を取得する（授業によっては、論述試験を課すものもある）。セミナーは、グループディスカッションや、ディベート、プレゼンテーションなど学生の参加が主体となる。セミナーで教員が一方向的に話をすることはほぼない。学期が始まる前に、学生にはシラバスという授業計画がわたされる。計画書には、毎週のテーマと2、3本の課題文献、20から30本の参考文献が指定されている。学生は、毎週課題文献を読んだ上でセミナーに出席することが義務付けられている。セミナーは課題文献を読んだことを前提として議論を重ねるため、読んでこないと参加することができない。日本のように、予習を必要としていない（事前読書を必要としない）講義に出席し、教員の話聞き、ノートを取り、学期末にレポートや試験を受けるのとはだいぶ異なっている。最終課題論文や試験では、どれだけ明晰に問いが立てられているか、論理的に思考が展開され論点が明らかにされているか、そしてそれがどれだけ説得的な文章で書かれているかが、判断される。教員は



---

それぞれにA4用紙1枚のフィードバックを書き、与えた点数の理由やどうしたら論文の質を高めることができるのかについて詳細にコメントする。このように、ブリストル大学のシステムでは、学生が専門分野の文献を読み、分析し、既存の知の批判的検討をしたうえで、自分の意見（異見＝これまでと違う意見）を論理的に表現するという訓練を重ねることになる。「訓練」とここでいうのは、批判的で論理的な思考は特別なものではなく、訓練を積みば一定度のレベルにはどの学生も到達できるものと考えられているからだ。

大学院の授業も基本的な教育目的と運営の仕方は同じである。ただ、すべての授業が少人数セミナーで行われ、課題論文の字数制限が長くなり、問いがより複雑なものになる。学部課程と大学院課程の最も大きな違いは、留学生の割合であろう。コースワーク（セミナーの単位取得）と短い卒業論文によって1年間で修士号を取得できるイギリスの大学院プログラムは、「雇用力（employability）」を高めようとする、留学生に人気である。手元にある昨年度の社会学・政治学・国際学学科のプログラム全体の統計をみると、イギリス人の学生が38%、他のEU加盟国から14%、他の国からの留学生が48%となり、留学

生が64%を占めている。特に最近増えているのは、中国からの留学生である。

英語を第一言語としない留学生は、英語で論文を書くという試練がある（もちろん一定の英語力をもっていることが入学条件になっているが）。しかし、それ以上に批判的・論理的思考を表現することに困難を感じる学生が多いように思う。特に、日本を含めた東アジアからの学生は、文献の要約を中心とした論文を書き、合格点をもらうことができない場合がある。先行研究（専門分野における既存の知識体系）を批判的に検討して、その上で自分の議論を論理的に展開するという経験と訓練を十分につんでいないためだろうと、自分の留学経験からも思う。

最近、日本の大学でも国際化戦略が進められているようだ。その一環として、英語での講義や授業も行われている。英語で表現することの重要性が、ますます高まっている傾向はいなめない。しかし、第1言語で批判的思考力や論理的表現力を身につけてこなかった学生には、「グローバル」な市場で「雇用力（employability）」を高めると信じられている、欧米の有力大学の学位を獲得するのは容易なことではないだろう。